

令和七年3月吉日初版作成

「遊えしむる姿」よさひ

言葉の意図

高嶋三郎

目次

- 「消えてゆく姿」という言葉の意図・・・・・・・・・・・・・ 3
- 「消えてゆく姿」という教えの狙い・・・・・・・・・・・・・ 4
- 闇の面の消えてゆく姿を全否定してゆく・・・・・・・・・・・・・ 4
- 消えてゆく姿の前で留意すべきこと・・・・・・・・・・・・・ 5
- 親神様と神聖（本心）との関係・・・・・・・・・・・・・ 6
- 本格的な神聖復活の時代を迎える・・・・・・・・・・・・・ 8

お願い

既に作成した資料（バックナンバー）は、ウェブサイト『白光北陸』のブログ欄に掲載しています。

より分かりやすくするため、ご感想があらば、お聞かせください。

次の連絡先にお問い合わせください。

（スマホ） 090-3346-6619

（メールアドレス） zensan@peach.ocn.ne.jp

「消えてゆく姿」と「言葉の意図」

先の資料『奥の奥の「私たち」になる』のなかで、消えてゆく姿という言葉は重要な働きをしていると考えられますが、一方『消えてゆく姿のみ教えを完全にマスターする』において、「この「消えてゆく姿」という言葉だけでは、この解脱はできないといわれています。それをどのように理解し、どのように意識を働かせればよいのでしょうか、という質問がありました。これに対する回答を整理したいと思います。

結論をから言えば、消えてゆく姿という言葉を通じて、「自分を赦し、人を赦し、自分を愛し、人を愛し、という教義の中心的な想念行為が含まれている。つまり、不幸、悲しみ、恐怖、恨み、妬み、憎悪、不幸、不満等々の想いや行為を、人間の真(神)性から出るものではなく、この世の中を、神の子人間が歩み続けてゆく時に削り取られてゆく、闇の面の消えてゆく姿である」と全否定してゆく『霊的存在としての人間』809ページ(1)という意識を働かせることが必要なのです。

まず何故消えてゆく姿が現れてくるのかを整理します。

親神様は生命の法則であり原理であって、別に人間自体に罰を与えたりすることはないが、その人間自体が自己の生命の働きをすみやかにするために、自己の肉体や幽体に付いた汚れを、浄め去ろうとするのである。それが病気となり、貧乏の状態や不幸困難の状態を現出させることとなる。

別の言葉で言えば、宇宙を運行させているやり方と、人間が変ってゆく変り方と、ピタッと同じようにしようと思って、神々が、守護霊守護神が一生命働いて下さっているのである。ある時は病気や不幸になるかも知れないが、そうやってバランスの取れないズレを消して、合わせてくださっているのである。宇宙の運行の変り方と、肉体人間の変化の状態が一つにならないと、不幸が出てくるわけである。すれただけ、天変地変も出てくる。

もともとこの世界は、神のみ心によって現わされた世界なので、悪いことのあるはずがない世界なので、悪いように見えるのは、神のみ心がまだはっきり現わされていない、つまり神のみ心の未開発のところ、悪や不幸のようなあがきを見せて、消えてゆく姿(開発はれてゆく姿)なのであると言われています。

「消えてゆく姿」という教えの狙い

五井先生が「消えてゆく姿」という教えを出されたのは、何故なのでしょうが。

まず、「現在現れている状態」というのは、過去において人間の心の波の中にあつた状態が、今消えてゆくこととして現われて来ているので、消えた消えてゆく姿を把えてゆくことと言っていることは、ちょうど幻影をつかんで騒いでいるのと同じことなのである。そしてそのほか現在現れているのは、自分の過去に放った想念だけでなく、違った思い、神様を離れたこの世を「ほそごう」という波が自分に感応して来て、自分の行為になっているのである。

そして「消えてゆく姿」という言葉の奥には、永遠につながる善いもの本ものの姿がはっきり存在してきて、消えてゆくに従って、その本ものの姿がはっきり現われて来るのであるという、真理を知らないうちにそこに現われた不幸災難や、環境の悪影響をしっかりとつかんでしまい、世に消したものを又つかんで放ちぬくことになり、二重の因縁として業生の層を厚くしてしまつのである。」

「消えてゆく姿」という言葉を使って、善人たちが少しの事や、過去になつてゆくことも今のないことで、自分を責めているのを、すっぱりと赦して下さるうとして、神様が私（五井先生）を通して、世界平和の祈りと組合わせて、説かせて下さったものだと言われているのです。

闇の面の消えてゆく姿を全否定しつつ

結論として消えてゆく姿の言葉を通して、闇の面の消えてゆく姿である、と全否定してゆく意識を働かせていると言いましたが、宇宙神の分身たる私たちが何故苦しんでいるのかといえは、「闇の崩れてゆく姿を自分自身だと同一視してしまつた、つまり認めてしまつたからだということを知れば、納得できます。

それを解説されたお言葉が『白光誌』1998年5月号P.12「にあります。

「この業というものは神がなくて現われたものではなく、間接的にはやはり神の力によって動かされているので、神がその必死を認めない時には、崩れ去るのである。

光一元の世界には闇がないと同様に、闇一元の世界で光の存在がな

い場合には、闇はそれ自身闇であることを見覚することは無いが、ひとたび光がそこに放射され始めると、光と闇との区別がはっきりついてくる。

そして光が前へ進むにつれて、闇は自身の姿をそれだけすつ、削り取られてゆく形になっていく。

神がその光線を地球界に働きかける場合には、どうしても地球界と同じような物質体の肉体人間を必要とする。ところがこの肉体身というのは、地上界に属する物質なので、地上界的な性質をそれ自体が持っているのです。神の光が地球界の闇を進んでゆくとつれ、未開発が開発されてゆく経過において、種々様々な動揺や変化が起こってくる。それを肉体人間が反動的に考え、かえって自身を闇の側に置いてしまい、闇の崩れゆく姿を自身の崩れゆく姿と同一視してしまったのである。

この不安恐怖つまり神の光、霊性を離れた考え方が無明であるわけだ、それが業想念の生まれた原因なのである。「

消えてゆく姿の前の留意すべきこと

私たちが、闇の面の消えてゆく姿に立ち向かうときに、留意することがあります。

●神性の人間を肯定するのに、肉体の想いで肯定しようとするのは無理なのである。肉体の人間の想いにはやはり業生の世界の様相しかうつらない。あらゆる肉体世界の想念や出来事を、その消えてゆく姿という想いに乗せて、神の世界、神の心である大光明の中、完全性の中、そして各個人に内在する本心(神性)の中に融合させてしまふ習慣を身に着けることである。

●自分の嫌なものが目の前に現われても、自分の心の中に現われても、これは消えてゆくのだなと思わなければ、なかなか消えない。消えてゆくのだなと思うことはどういうことかということ、再びいやな事はしないと誓うことである。

●人間というものは、永遠の生命を生かすためには、どんな苦しみをも逃げてはいけない。苦しみというものは、魂を浄めるものなのである。魂の進化のためには、あらゆる苦しみをなめ、経験することは必要であり、それを超えることにより、魂は進化する。鍛えられる時に、人は人のせいにならず、自分を責めたりすることは魂を鍛えたことにはならない。

●どんな痛みがあっても、苦しみがあっても、その想いが、心がそこに把られない。痛みの中に入ってゆかないようにしてゆくこと。このようになるには、常に自分の意識を光の中に置いていないとできない。

●消えてゆく姿を自分の肉体の想いで光の中に入れることはできない。入れるには、守護の神霊の力を借りて、親神様の光の中に入れてもらうのである。五井先生は、消えてゆく姿の波動は横にまわっており、守護の神霊の力を借りて、縦の回転にして親神様の光の中、完全性の中、そして各個人に内在する本心(神性)の中に融合させるイメージをすることを五井先生は進められています。

●心に苦しみが深く突き刺さり、なかなか親神様の光の中に入れることができない、闇の面の消えてゆく姿に直面した時、「いい体験をさせてもらった」と感謝して、親神様の光の中に入れてもらうこと大切である。なぜかというところ、その感謝によってまず闇の面の消えてゆく姿の中に落ちこたえている自分の意識を、守護の神霊に向けることによって神聖の中に居ることができるようです。

●善は善、悪は悪とそのまま素直にみて、すべては消えてゆく姿という想念で神のみ心に入れ切っていくこと。業想念の現れである悪や不幸に把われたら、消えてゆく姿という順序を踏まなければ、神の子人間は

現れないのに、ただやたらに、神の子完全田満と思わないことである。事実はなかなかそうはなれないので、ついには自己や他人の不完全さに打ちひしがれ、自他の現象をこまかしの目でみて、あたかも自分は神の世界にそのまま住んでいるのだという印象を人に与えようとするような偽善者、不正直な人になってしまうからである。『霊的存在としての人間』78ページ)

これらの留意点は、消えてゆくという意味、即ち業想念自体は元々神のエネルギー(光)を私たちが誤てる想念行為で生じたもので、それが神のみ心によって消されてゆく姿であると認識し、守護の神霊の力を借りていかにスムーズに親神様の光の中に入れて融合させ、光に還元していくかという視点から整理されています。

また闇の面の消えてゆく姿も神本来因の消えてゆく姿もすべて親神様の光の中に入れていける習慣を身につけることができれば、私たちの魂は大なる進化を遂げることができるよう。

親神様と神聖(本心)との関係

消えてゆく姿のみ教えを行っていく上で、自分の意識を祈りや印によ

って親神様の光の中に入れていたことが不可欠なことはこれまでみ教えを整理してゆく中でお分かりになれたことと思います。

消えてゆく苦悩の中に自分の意識をおいたままだと、苦悩と分離の、波動の低い世界から解脱することはできないのです。

親神様の光の中に入ると、その光の中には、悪いもの、悪いことが、一切無い。完全圓滿であり、大智慧、大愛で満たされている。その中に一切の想念を統一してしまうと、そこから生まれてくる智慧能力によって開運もし、安心立命していくと言われているのです。

ここで、親神様と私たちが日々降ろしている神聖復活の印の神聖との関係について、整理しましょう。

親神様は宇宙神であり、神聖は、宇宙神のみ心の中に生まれ、チャクラを通して、私たちの内側に降りてきている、内なる神の存在であり、私たちの本心とも呼ばれているものです。私たちが宇宙神の分身と呼ばれる所以（ゆえん）はこれらのごときを指して言われているのです。

本心について『變幻自在の心』の『生命と心について』の項目から整理してみましょう。

(1) 肉体人間の脳天(第七のチャクラ)は肉体以外の体、つまり幽霊、神と仮に呼んでいる各階層の体につながっている場であるが、神霊の階層の心の波動が、そのまま素直に肉体の脳天に伝わっている心を本心と呼ばれている。

(2) 本心は自分の頭の中や、心臓の辺にあるのではなく、神のみ心と二つのところにある。

(3) 本心は神そのものの心であり、永遠の生命そのものの心である。

(4) 生命と本心とは、共に、宇宙神のみ心の中に生まれているが、生命は大自然の根源の働きそのものであり、本心はその根源の働きをその智慧能力で、大調和達成のために生かきぎってゆく働きをしている。

(5) 本心は、意識したり分別したり、不安混乱したり、ああでは無い、い、こころではない、とゆれ動く心(業想念波動)ではない。

(6) 肉体人間の脳天(第七のチャクラ)が神界以外の階層即ち幽界から伝わってきている波動に蔽われてしまうと、神霊の心そのままの働きはできなくなる。そのような時業想念で本心を求めても、本心を自らのものとして、つかむことはできない。業想念波動を消滅し、空(こころ)になったところから、本心は現れてくるのである。

本格的な神聖復活の時代を迎える

これまで幾転生、私たちは、本心と一つになれなかったのは、肉体生活をして行くうちに、本心があることを見失った、即ち忘れてしまったからと言われています。思い出すことが、なぜ難しかったのでしょうか。

五井先生は『真の幸福』においてその難しさについて言及されています。「今日までは、自分たちの欠点を直してからでなければダメであったり、清らかな心境になっていなければ、神に祈れぬということになっていて、神様に近づくのがなかなか難しかったのである。自分の欠点を直して身体の、浄まってから神様に祈るのでは、大半の人が神様に近づくことはできない。」と。

それは、当時地球自体の波動の次元が低かった、言い換えれば、地球自体が地球人類の誤てる想念に厚く覆われていたからともいえます。

そのような時代に、五井先生は、直霊と合体され、神界と肉体界をつなぐ光の柱となられ、真理と大調和の光（救世の大光明）を降ろされ、夜明観音の働き（ご自身のお言葉）を担って、人類滅亡の危機を幾たび

も乗り越えさせ、今日まで私たちを導いてくださったのです。

その中で、2003年から2009年にかけて昌美先生ご指導の「宇宙究極の一筋の光を降ろすご神事」を行い続けることにより、私たち会員全員の叡智のチャクラ（第六チャクラ）は正しく開かれ、2012年七月の大行事の大成を果たした結果、これから生じる大災害（政治経済の低迷、宗教対立、民族紛争、疫病、原爆、テロなどあらゆる人智、あくなき欲望にて作り出してきた大カルマによる）を救いうる神力が整ったという秘神示がありました。さらに2014年一月の新年祝賀祭において、「宇宙神の根源に汝らの魂は直結した」というご神示が昌美先生を通して降ろされました。

そして2015年に「豊かで調和した世界を協力して築いていこう」という、個人と団体が立ち上げた国際的ネットワーク、「富士宣言」が立ち上げられ、2017年七月に神性復活の印が会員に降ろされました。

2012年十二月を境に一段と地球を取り巻く波動は高まり、二万6000年ごとに訪れる次元上昇の時代に入ると言われています。

世界人類が神聖に目覚め、復活していく環境は整えられ、これまで五井先生が教えてくださったみ教え、つまり消えてゆく姿で世界平和の祈りや印の効力が今まさに発揮されているのです。